

## 5分でケースをレポートする(1)

### 1. 3つの作業過程(インテイク、アセスメント、プランニング)を意識する

収集・整理した情報を評価し、何らかの仮説や理解(アセスメント)にまとめ、そのアセスメントから対応・方針を検討します。レポートの際には、これまでの支援経過や細かな情報、来談者が語った内容などに時間をかけ過ぎず、あなた自身のアセスメント(理解・解釈・仮説)を中心に述べるようにしてください。

### 2. アセスメント(理解・解釈・仮説)を述べる

アセスメントとは、『一つ一つの情報を自分なりに解釈し、それらを組み立て、生じている問題の成り立ち mechanism を構成し(まとめ上げ)、支援課題を抽出すること、あるいは、その人がどんな人で、どんな支援を必要としているのかを明らかにすること』と考えてみてください。

アセスメントにあたっては、①生来的な気質や発達特性、疾患などの生物的要因、②不安、葛藤、希望、自己感、認知、内省性、感情統制、防衛機制などの心理的要因、③身近な人たちとの関係、家族や学校・職場への適応などの社会的要因に注目してください。また、3つの要因の関連性にも留意し、生じている問題や「その人」に関する『生物-心理-社会的な包括的アセスメント』と、今後の支援にあたって核心になると思うことをレポートの冒頭で簡潔に述べてください。たとえば、「頭痛や腹痛のために不登校になっている中学生です。軽い知的な遅れがありそうですが、周囲の認識が乏しいことが中心的な問題だと思います。家族に理解を求めて発達について査定したうえで、環境を調えることが中心的な課題になりそうな事例です。」といった感じです。

こうしたレポートによって、①軽度知的障害ないしは境界知能という生物的要因、②周囲の認識不足によって能力以上のことを期待されている、適切な支援が提供されていないといった社会的要因、③その狭間で本人の不適応感が高まり、抑うつや身体症状が生じているといった心理的要因が絡んでいること、また、それら3つの要因が関連し合っている不登校ケースであることが聴き手に伝わります。

こうしたアセスメントに基づいて支援課題をリストアップします。支援課題がいくつあると思っているかを述べてください。どの課題を優先させるかについても考えてみてください。緊急性の高い課題があれば、それを優先します。すぐにやるべきことは優先順位の上位、じっくり取り組むべきことは下の方でよいかもしれません。

これまでの支援経過やケースの状況を説明しただけで支援課題や支援方針に飛んでしまうレポートは不合格です。重要なのは「その状況や問題が、なぜ、如何にして生じているか」です。

### 3. 対応・方針

アセスメントに基づいて支援方針を述べてください。上記の事例であれば、①生物的要因(知

的能力)に注目した学習指導や生活指導など、②個別面接や生活場面において自己評価の回復や不安の軽減を図るような心理的アプローチ、③家族にはたらきかけて本人が困っている状況を理解してもらい、学校にクラス運営や個別的支援について検討してもらいなどの環境調整(社会的アプローチ)、そして、④それらのいくつかを並行させた複合的なアプローチ、が考えられます。

アセスメントの後半でリストアップした個々の支援課題に対応する支援計画をできるだけ具体的に(誰が、どんな方法で、いつまでに、どのくらいの期間)述べてください。支援計画の策定にあたっては実現可能性を重視してください。実現可能性を高めるためには、本人・家族のニーズに沿った計画立案を心がけた方がよいでしょう。障害者や高齢者の事例では、その人の生活観や人生観(どんな人生・生活を送りたいか)、趣味や好みを踏まえた支援方針を工夫してみてください。

最後に、情報－理解・解釈・仮説－方針の整合性を確認してください。現時点でアセスメントに至るまでの情報が不足している場合には、今後、どのような情報を、どのような方法で集めるかを述べてください。ここまでで5分です。

\* 出典: 明石書店 医療・保健・福祉・心理専門職のためのアセスメント技術を高めるハンドブック  
第2版

令和元年度相談支援従事者研修企画運営検討会議の資料より

## 5分でケースをレポートする(2)～「その人」についてのアセスメント

### 1. まずは言葉にしてみる

「あの人にどのように関わったらよいのか」に迷っているときは、「その人」のアセスメントが必要です。まずは、漠然と「こんな人」と感じていることや、「あれじゃあ、誰ともうまくいかないだろうな」などと思っていることを、しっかり言葉にしてみましょう。

### 2. 三つの軸を意識する

近藤式アセスメント表(事前課題②「インテーク・評価・支援計画策定」様式)を使って、①生物(気質、発達、障害、疾患)、②心理(不安、葛藤、希望、自己感、認知、心理的資質、感情統制、防衛機制など)、③社会(対人関係の特徴や適応)という3つの軸を意識しながら、「こんな人／子どもである」という理解や仮説を簡潔に述べてください。たとえば、「穏やかで親切なときと、イライラして怒りっぽいときが極端で、気分の波が大きい子です(感情、気分)。身体症状や一人で眠る寂しさを訴えてくるなど、常に関係を求めているようにみえます(不安)。ただし、本児が望んでいるのは、甘えや依存が満たされるような二者関係レベルの対人関係のようです(対人関係)。集団に適応することはできず、些細なことで怒り出したり、落ち込んだりするので、手厚い関わりが必要な子です(適応)」、あるいは、「中学3年生の女の子です。自己イメージは否定的で(自己感)、他者から好かれていないと感じやすいようです(自己・対象の認知)。居場所がなく、非行仲間からの誘いを断れないため、引きずられるような形で問題がエスカレートしている面があるようです(不安、対人関係)。知的には平均下位で、表現力や内省性はやや低いのですが(生物学的な知的能力と内省性)、1対1の場面ではとても素直で、面接を一つの支えと感じてくれそうな子です」といった感じです。

### 3. 言っていることと示した反応に注目する

普段から「その人が」話していることや、ある出来事の際に示した反応は、「その人」理解にとっても役立ちます。言動や反応にどのような意味があるか、どのように解釈できるかを考えてみましょう。たとえば、「あの子がドアを蹴破った」のは、みんなの前で自尊心を傷つけられたことへの憤怒かもしれないし、平等に扱われていないことや差別されたことが悲しかったのかもしれない。

### 4. 無意識(身体化、失錯行為、抵抗、防衛など)に目を向ける

その人の言動だけに囚われず、「ああは言っているけれども、本当の本当はどんな気持ちなんだろう」とか、「表向きは身体的な不調で登校できないようだけど、本当の本当は学校での友だち関係に苦勞しているのではなかろうか(心身相関、身体化)」「ご本人も気づいていないみたいだ

けど、遅刻が増えたのは、この面接がつからなくなっているためではないか(抵抗、失錯行為)」「妙に  
明るいけれど、本当の本当はとても悲しいのではないだろうか(防衛機制、この場合は反動形成)」  
などと考えてみてください。

## 5. ストーリーを描く

その人は、どんな人たちと、どんなふうに暮らしてきて、どんな影響を受けてきたか、問題が発  
現する時期にはどのような出来事があった、それをご本人はどのように体験していたのか、その  
結果、どのような葛藤が生じ、それがどのような問題として顕在化し、維持されているのか、とい  
ったストーリーを読み解くことを意識してください。また、過去の重要な人間関係が援助者との関係  
に影響しているかもしれません(転移)。こうした視点は、「現在のその人」に目を向けるだけでは  
「理解できた」と感じられないときに役に立ちます。ある地域で、夕方になると大声で叫び始める単  
身高齢者のことが問題になっていました。自宅を訪問した保健師は、この人に軽い片麻痺がある  
ことに気づきました。脳血管障害や認知症に伴う夜間せん妄の可能性を伝え、繰り返し受診を勧  
めましたが、頑なに拒絶されるだけでした。何度目かの訪問で、いつもは取り付く島のないような  
不機嫌な人が、家族の話題になると急につらそうな表情、しんみりとした口調になることに気づき  
ました。その後、この人が親や兄弟からは見放されたと感じていること、さらに、前任者の勧めで  
受診に至ったものの、その後、訪問が減ったことで、前任者からも見捨てられたと感じていること  
がわかってきました。生活上の安全管理はできているので、受診を急ぐよりも、関係づくりを優先し、  
受診したとしても地域の支援が薄くなることはないかと理解してもらう必要があります。

## 6. 強みにも目を向ける

厳しいケースであればあるほど重要な視点です。

\* 出典: 明石書店 医療・保健・福祉・心理専門職のためのアセスメント技術を高めるハンドブック  
第2版

令和元年度相談支援従事者研修企画運営検討会議の資料より